

主 编：杨 伟

副主编：王宗瑜 赵戈非

四川外语学院日本学研究所丛书 ③

西南地区 日本学的构筑

以 日 本 学 研 究 的 方 法 论 与 实 践 为 中 心

XINAN DIQU
RIBENXUE DE GOUZHU

主 编：杨 伟

副主编：王宗瑜 赵戈非

四川外语学院日本学研究所丛书 ③

K313.07-53

西南地区 日本学的构筑

——以日本学研究的方法论与实践为中心

XINAN DIQU
RIBENXUE DE GOZHU

——本书由日本国际交流基金赞助出版

重庆出版集团  重庆出版社

图书在版编目(CIP)数据

西南地区日本学的构筑:以日本学研究的方法论与实践为中心 / 杨伟主编. —重庆:重庆出版社, 2011.8

ISBN 978-7-229-04461-9

I. ①西… II. ①杨… ②王… ③赵… III. ①日本—研究—汉、日
IV. ①K313.07

中国版本图书馆CIP数据核字(2011)第168960号

西南地区日本学的构筑

——以日本学研究的方法论与实践为中心

XINAN DIQU RIBENXUE DE GOUZHU

YI RIBENXUE YANJIU DE FANGFALUN YU SHIJIAN WEI ZHONGXIN

主 编:杨 伟

副主编:王宗瑜 赵戈非

出 版 人:罗小卫

责任编辑:雷 刚

装帧设计:重庆出版集团艺术设计有限公司·黄 杨 吴庆渝



重庆出版集团 出版
重 庆 出 版 社

重庆市长江二路205号 邮政编码:400016 <http://www.cqph.com>

重庆双百印务有限公司印刷

重庆市天下图书有限责任公司发行 <http://www.21txbook.com>

重庆市渝北区财富大道19号财富中心财富三号B幢8楼

邮政编码:401121 电话:023-63659760, 63658927, 63659920

全国新华书店经销

开本: 889 mm×1 240 mm 1/32 印张: 16.25 字数: 354千

版次: 2011年8月第1版 印次: 2011年8月第1次印刷

书号: ISBN 978-7-229-04461-9

定价: 45.00元

版权所有,侵权必究

写在本书出版之际

近年来,随着中国西部开发战略的实施,进驻西南地区的日本企业迅速增加,民间交流也日趋频繁。在这样的背景下,本地区各大学纷纷增设日语专业,如今日语专业已经成为继英语专业之后的第二大外语专业。然而,我们不能不清醒地看到,尽管西南地区的日本研究和日语教育取得了长足的进步,但与上海,北京,东北等地区相比,显然还存在着不小的差距。

与此同时,面对全球化进程不断加速与异文化冲突日益多发的当今世界,我们越来越意识到,日语教育已不再是单纯的语言技能的培养,同时也必须承担起理解包括日本文化在内的异文化的重任。为此,包括四川外语学院日本学研究所在内,西南地区的各日语教育机构和研究机构都做出了各种尝试和努力,但不能不说,真正的日本研究还处在起步阶段。为了开拓日本研究的新局面,四川外语学院日本学研究所在日本国际交流基金的大力支持下,与日本法政大学国际日本学研究所合作,于2008年至2010年的三年间,分别召开了题为“诗人黄瀛与多文化间身份认同”“从西南地区考量日本——中国西南地区与日本学研究的可能性”“日本学的方法论与实践——以日本研究的视点和态势为中心”的国际研讨会

暨讲习会。

通过这些研讨会,我们试图以“多文化间身份认同”这一虽然前沿但却较为单一的研究领域为出发点,进而拓展领域,探索构建“日本学”这一总括性学问的可能性,然后再过渡到对“日本学方法论”这一重要课题的深入讨论上。为此,我们分别邀请了日中文化交流协会会长辻井乔,著名学者王敏、王晓平、李廷江,日本学者胜又浩、川村凑、安孙子信、田中优子、加藤久雄、井上优、楠本彻也、滨森太郎、冈村民夫、大塚常树、栗原敦、细谷博等人与会进行讲演,而西南地区的四川大学、重庆大学、西南交通大学、贵州大学、云南大学、西南大学、成都理工大学、重庆师范大学等各日语教育机构和研究机构的学者也踊跃参会,发表研究成果,与日本学者进行学术交流,从而取得了丰硕的成果。不仅如此,西南地区以外的上海、西安、天津、河南等地的学者也积极参与,有效地推动了跨区域性日语研究网络的有机形成,无疑,这也有助于强化整个中国日本研究界的学术交流,提升整个中国的日本学研究水平。

为了反映上述研讨会的成果,四川外语学院日本学研究所所在日本国际交流基金的赞助下,于2010年出版了“四川外语学院日本学研究所丛书”第1辑《诗人黄瀛》,收录了2008年“黄瀛与多文化间身份认同”国际研讨会上的重要论文。而作为日本学研究所丛书的第3辑,现在这本题为《西南地区日本学的构筑——以日本学研究的方法论与实践为中心》的论文集又要出版了。本书主要收录了2009年“从西南地区考量日本——中国西南地区与日本学研究的可能性”和2010年“日本学的方法论与实践——以日本研究的视点和态势为中心”这两次国际研讨会的主要论文。

在此,谨向不吝赐稿的各位作者表示由衷的感谢。亦向

为本书提供出版赞助的日本国际交流基金表示真诚的谢意。

此外,作为主编,还要特别感谢重庆出版社的江萍女士和责编雷刚。他们为本书的出版所付出的心血,让我心生敬佩。同时也对丁照卿和孙苗在日语校对上的不苟精神一并致谢。

四川外语学院日本学研究所所长 杨 伟

2011年5月31日

目 录 CONTENTS

「閉じた国際化」と「開いた国際化」

——‘国際日本学’の試み

安孫子信 1

日中における日本学研究の発展の経験を生かして

王 敏 12

国際日本学としての江戸学

田中優子 32

「日本を方法とする」日本学の新展開

杨 伟 45

平民語で複雑な事を言う技術

——文字の揺らぎを手がかりとして

濱森太郎 66

日本汉文学与东传汉语词汇的多源性

——《日本灵异记》双音节词探源

王晓平 85

接受美学视域下俳句翻译的可能性

李 旭 107

俳句の季语和汉诗的季节性词语之比较

黄 芳 范惠芬 120

山上憶良の『貧窮問答歌』における六朝思想の投影

蔡春晓 135

论《千字文》在日本的流布与衍变

谭建川 155

もう一つの「実学」

—東アジアにおける実学研究の現状と問題点—

陈毅立 168

中国近代軍制の発祥地と民主主義の中継所

—雲南陸軍講武堂創設發展をめぐる

日本との繋がりを手がかりに—

赵毅达 184

入阁前的风见章与中国

王宗瑜 200

アジアのなかの私小説

勝又浩 215

視点の移動から読む『暗夜行路』

孙 苗 226

东西方文化的冲突与交融

——简论谷崎润一郎《人鱼之叹》的艺术内质

钱晓波 243

论海外知己

——丰子恺与谷崎润一郎的比较研究

林茜茜 253

漱石作品における待遇表現の談話分析

——「翻訳」授業の視野もいれて——

吴少华 266

从复调小说理论看梅崎春生的《轮唱》

丁照卿 280

『夏姫春秋』における「風」

段云兰 290

无限的孤独

——解析樋口一叶的《浊流》

胡媛媛 305

日本語と集団志向文化

——日本人の言語意識について

徐 曙 314

改革开放后日本人中国观的形成与变化

——基于日本内阁府《关于外交的舆论调查》的研究

张厚泉 李 薇 王 蕾 331

中国人眼中日本“自杀大国”印象之成因分析

——以信息传递及理解为中心

杨 中 348

中国における日本アニメ・マンガ文化の受容

——日本アニメ・マンガ文化の影響を中心に

田莎莎 358

天照大神——日本神话中的“理想女性”

葛慧玲 369

浅谈日语拒绝策略的文化价值观

李翔华 377

大学の日本語教師の「研究認識」に関する一考察

——中堅教師のPAC分析を通して——

尹 松 386

日本語学習者の「話す力」をつける

学習ストラテジーに関する実証的研究

徐 琦 404

日语学习动机与学习效果关系的调查研究

——以重庆市部分高校日语专业本科学生为例

冯 莹 孙 炜 414

現代日本語の助詞と格助詞間の

相互承接に関する一考察

刘少东 428

言語学系日本語学術論文の「冒頭文」に対する一考察

——文末表現と文型を中心に

王蜀豫 445

出来事生起のありかたを表す

副詞と文末表現との共起について

彭玉全 468

关于日语间接回指的类型

马兰英 486

「閉じた国際化」と「開いた国際化」

——‘国際日本学’の試み

安孫子信

1 国際化・グローバルゼーション

国際化・グローバルゼーションの波が押し寄せてきている。このことを少し詳しく言うと以下のようなことになるであろう。ヒトとモノとの関係(自然)、さらにはモノに働きかける際の分業に関わるヒトとヒトとの関係(社会)には、時や場所に依らない不変かつ普遍的な面が認められる。とくに近代以降、それらの不変で普遍的な関係を記号へ置き換えることで、新しい科学と技術(ヒトとモノの関係において)が、そして、新しい経済・政治・社会制度(ヒトとヒトの関係において)が成立してきた。こうして、そのような科学・技術、また経済・政治・社会制度で扱われるのは、ヒトやモノである以上に、記号やその蓄積としての情報なのである。ところで、ヒトやモノをやり取りする交通網などの手段も大いに発達はしたが、近年、劇的に進化したのは、インターネット網に象徴される記号や情報をやり取りする手段である。その進化の結果、記号や情報の処理が世界基準へと一挙に平準化されてきたが、今やそれに引きずられる形で、ヒトとモノ、ヒトとヒトとの関係のあり方にも、待ったなしで、世界基準への平準化が、つまりは国際化・

グローバリゼーションが、押し寄せてきているのである。

2 文化

この国際化・グローバリゼーションは全く新しいことである。しかし、それはきわめて古くからのことでもあると言い得る。すなわち、ヒトとモノの関係、ヒトとヒトの関係の国際的な平準化ということ言えば、奈良時代の、そして明治維新期の日本の変革も基本的には同じ流れの中で起こったことと言い得るのである。このような国際化・グローバリゼーションは根深く、絶えず繰り返される、おそらくは文明に不可避の過程である。そうだとすると、われわれは事態の推移を傍観する他はないのであろうか。この過程に立ち向かい、それに問題をぶつけることはできないのであろうか。自然・社会科学分野に属する事柄の多くが、このような国際化・平準化に自ずと向いているのに対して、人文科学分野に属する事柄、たとえば、各々の社会に固有な文化は、この流れとは噛み合わない面を持つ。この国際化の流れの中で、たとえば文化について、われわれはどのように考えたらよいのであろうか。

3 三つの立場

ありうる三つの立場を取り上げてみよう。

A: 個別文化は国際化・平準化とは相容れない。長い目で見て個別文化は消失していかざるをえないし、それは致し方ないこと、さらにはむしろよいことである。(最後はす

べての人がすべてのことを英語・インターネットで扱うようになるであろう。個別文化は消えるし、むしろ消えるべき。たとえば、尺貫法や陰暦のように。)

B: 個別文化の中で国際化・平準化に耐えるものを見出し、できるだけ国際化・平準化に引き付けて、生き残りを図るべきである。(最後はすべての人がすべてのことを英語・インターネットで扱うにしても、そこに、コンテンツとして個別文化を滑り込ませることは可能であろう。たとえば、和食や柔道のように。)

C: 現在進行中の国際化・平準化とは無縁な、別の普遍性を個別文化に探り、個別文化の別様の国際化を図るべきである。(英語・インターネットが保障し実現する国際化・平準化とはまた別の国際化を、個別文化に探り得るであろう。)

4 アンリ・ベルクソン

A、Bはシナリオとして一応了解されようが、Cはどういうことを指すのか。それをフランスの哲学者アンリ・ベルクソン(Henri Bergson 1859-1941)の「閉じた社会」と「開いた社会」の枠組みを借りて示していきたい。ベルクソンはニーチェとともに、19世紀後半の“生の哲学”の主唱者であった。彼の最後の主著『道德と宗教の二源泉』(1932)の第1章で「閉じた社会」と「開いた社会」とを対比させる道德・社会論が展開されている。

5 「閉じた社会」

「閉じた社会」、それは、科学・技術によるモノの支配を基礎に置き、その際に不可欠のヒトの統御(分業体制)を、習慣・道徳・宗教のネットワークによって確保していこうとする社会である。この社会では社会の自己保存が至上命題であり、ヒト個々も社会の一種の強制力(「～しなければならない」)に身を委ねることで自己保存を図っていく。自己保存を旨とする以上、見かけの広狭にかかわらず、この社会は敵対するヒトや社会に対して本質的に閉じている。「実際、われわれの文明社会にしても、これもやはり閉じた社会なのだ。われわれが本能の途で達していた小さな集団…こうしたものに比べれば、われわれの文明社会はいかにもはなはだしく広大ではあろう。だが、いくら大きいと言っても、文明社会も所詮は一定数の個人を包容するだけで、他の個人を締め出すことを本領としている点に変わりはない」^[1]。われわれが通常見る、家族、地域社会、国家、国際社会、そのすべてが、「閉じた社会」である。

6 「開いた社会」

「開いた社会」、それは、モノやヒトの統御、つまりは自己保存の利害関心から解放された特権的な個人(「例外者」)のまわりに、その個人の魅力に引かれて自ずと人が集ることで形成される社会である。ここでは人は「例外者」の魅力(「招き」)に応える内側からの駆動力(「～せざるをえない」)

によってのみ動かされており、その人自身も自己保存をものはや顧みなくなっている(「それがなんだろう」)。「彼ら(例外者)がその背後におびたしい群集を引き寄せたのはなぜであろうか。彼らは他人に向かって何も求めない。しかも彼らは漁(すなど)るのである。彼らはあれこれと論す必要すらない。彼らがただいるというだけでよい。そういう人がいるということが、そのまま招きとなる」^[2]。「例外者」は、付き従う者が誰であるか、またそもそも付き従う者がいるかいないかにも無頓着である。しかし、その魅力(「例外者」であることの謎)ゆえに、人を引き付ける。そこには排除はなく、そこに形成される集団は「開かれて」いる。例外的な芸術家や思想家のまわりに、歴史を通じて人々が連なっていくことで形成されるような共同体が、この「開いた社会」である(世界中で毎晩のように演奏されるベートーヴェンを思い浮かべていただきたい)。

7 ソクラテスの例

ソクラテス(Socrates BC469—399)。彼は古代ギリシャの哲学者。アテナイの人。西洋哲学の始祖。「国(アテナイ)の認める神々を認めず鬼神を導入しようとし、かつ若者に害毒を及ぼした」という理由で死刑判決を受ける。それを受入れ毒杯を仰いで刑死した。

8 アテナイと「閉じた社会」

ソクラテスが生きたアテナイはすでにペルシャを破り

(BC479)、大政治家ペリクレスの指導の下(BC461—429)で盛期を迎えていた。科学・技術・経済・産業、そして学問・教育は栄え、人類史に残る文明の花開く社会であった。対外的にもデロス同盟(BD478—)の盟主として200余の同盟諸国を束ね、地中海世界における軍事・政治・経済の一大拠点を形成していた。ただし、覇権の広がり如何にかかわらず、アテナイは「閉じた社会」であった。事実、地中海世界のもう一方の盟主スパルタとは対立し長く争った(ペロポネソス戦争BC431—404)。アテナイはその戦争に敗れることで衰退に向かって行く。他方で、ソクラテスを社会紊乱の罪で刑死に追いやった一事からみても、それが「閉じた社会」であったことは明らかである。その社会では、端的に、モノとヒトの統御だけが、つまりは自己保存だけが目指されていたと言い得よう。

9 ソクラテスと「開いた社会」

ソクラテスの刑死は、彼を知る若きプラトン(BC427—327)に「目がくらむ思い」を引き起こすことになる(「例外者」からの招き)。死刑判決後も、ソクラテスは国外に逃亡しようとするれば逃亡できたし、友人たちも熱心にそれを勧めたが、彼はそれを拒み、従容として毒杯を仰いだのである。‘なぜソクラテスは死んだのか’、プラトンはその謎に挑むべく、実践政治家として生きる道を断念し、哲学に向かうことになる。そしてこのただ一事、‘なぜソクラテスは死んだのか’という謎を解くために、生涯に36編の著作(主に対話編)を書き継いでいくことになる。そしてこのプラトン